



セルツキーのマルクス批判と民主主義的社会主義

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白石, 正夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/580

セルツキーのマルクス批判と民主主義的社会主义

白 石 正 夫

Selucký's Criticism of Marx and Democratic Socialism

Shiraishi, Masao

Abstract

R. Selucký firstly attributes the failure of the existing socialism to Marx's theory. He argues that Marx was wrong when he denounced the market system in favour of 'one state · one factory' system. Abolition of market means the destruction of the economic ground of freedom and equality, bringing in the centralization system instead. Secondly Selucký finds the political system in Marx's thoughts being democratic and republican. He naturally has to point out a contradiction between the economic and political ideas in Marx. Selucký asserts that the theoretical basis of democratic socialism can be gained by revising Marx's theory on economics. Finally Selucký insists upon the necessity of market for democratic socialism, examining some conditions in setting up 'market socialism'. This paper analyses the above points in Selucký's *Marxism, Socialism, Freedom*.

目 次

はじめに

一 マルクスの経済構想

二 マルクスの政治構想

三 市場と疎外

四 一国一工場論

五 市場と自由・平等

六 『経済学批判要綱』

七 政治と経済の分裂

八 民主主義的社会主義の諸原則

九 若干の問題点

はじめに

自由と民主主義を欠いた既存の「社会主義」の失敗の原因を、R. セルツキーは、それが非市場経済を採用した点にあると考える。従って、社会主義に市場経済を結合した市場的社会主義によって、民主主義的な社会主義は可能となると主張する。これは、それぞれ独立した労働者自主管理企業による市場経済システムと、政府による指針的経済計画とを結び付けたものであり、これによって、社会福祉も、消極的自由も、そして積極的自由もまた最大化する、と彼は指摘する。

ところで、セルツキーは、既存の「社会主義」が非市場経済を採用したのは、マルクスの理論にその根拠があると考えている。つまり、セルツキーは、既存の「社会主義」の失敗の原因を、マルクスの市場廃止論に求めているのである。そこで、セルツキーは、このマルクス理論の徹底的修正によって初めて、先の民主主義的社會主義の理論的基礎が得られるとして、マルクスを詳細に批判している。小論は、このセルツキーのマルクス批判、および民主主義的社會主義に関する主張を検討する¹⁾。

一 マルクスの経済構想

セルツキーは、マルクスが市場を批判し、その廃止を主張し、一国一工場の社会主義構想を提起した、と判定し、その点にマルクスの誤りがあると指摘する²⁾。なぜ誤りなのか。そもそも、市場には三つの前提条件があるのであって、それらがなくならなければ市場をなくすことはできない。³⁾ これらの前提のうち、社会内分業を廃止することはできないし、希少性をなくする展望も余りない⁴⁾。そこで市場をなくするためには、せめて第三の前提・生産者の自立性

を廃止しなければならない⁵⁾。ここから、生産手段の国有化による私的所有の廃止、一国一工場というマルクスの構想が出てくる⁶⁾。しかし、生産者の自立性を奪うことによって生ずる市場の廃止は、自由と平等の経済的基礎を破壊する。なぜなら、市場の本質は、交換者の自由と平等という点にあるからである。確かに、市場的平等は形式的であり、労働者にとっては不平等である。従って、市場の廃止を社会主義的救済手段として提示することは論理的に見える。しかし、非市場的社會主義は、資本主義の形式的な平等と自由を実質的な平等と自由に転化できないばかりか、その形式的自由と平等さえも破壊してしまう。すなわち、市場は、形式的平等、等価性及び自由の水平的関係からなる経済構造を創出するが、分業と希少性をそのままにした非市場的社會主義は、人格的依存、優越と服従の垂直的関係からなる構造を生み出すだけである⁷⁾。なぜなら、非市場的社會主義システムでは、社会的計画は一つのセンターで作り上げられなければならない、それは全経済単位を拘束するものでなければならない。つまり、中央集権制が不可避となるのである。ここでは、統制・管理する者とされる者との分業はなくならず、利害の対立もなくならない。指令された機能の遂行を強いられる労働者は、支配階級たりえず、計画し管理する官僚が、労働者の代理として支配階級となるのである。社会的資本の管理者と直接生産者との間の経済的、政治的対立は除去できず、政治権力と経済権力は結び付いてしまっている⁸⁾。マルクスは、労働の疎外は市場関係から生ずると考え、市場を廃止することによって疎外をなくそうとした。しかし、非市場システムにおいても、市場的疎外形態たる労働と生産物からの労働者の疎外はなくならず、その上、自分の賃金、計画、システム全体からの労働者の疎外という新形態のものが加わるだけである⁹⁾。指令的計画化は、企業内管理には有効でありえても、社会統制に当てはめれば、かえって非効率的・無力となり、厳格な制裁と恐怖の雰囲気を伴った強制的指令が不可欠となる。それは文明人にとっては耐えられず、民主主義的社會主義理論にとって受容しがたい¹⁰⁾。そもそも、希少性と社会的分業とを克服しない単なる市場の廃止は、粗野な共產主義を生み出すだけである¹¹⁾。

二 マルクスの政治構想

以上のようにマルクスの経済論の「誤り」を認識したセルツキーは、つぎにマルクスの政治論を分析する。マルクスは革命後の国家形態をプロレタリアート独裁と考えているが、「独裁」という表現とは逆に、その統治形態は自由主義的教義の基本条項を含んだ民主的共和制に他ならない、とセルツキーは指摘している¹²⁾。そこで、セルツキーは、ではプロレタリアートはどのようにして支配階級になりうるかと問う。生産手段が国家の手に集中されるなら、経済権力は、プロレタリアートによってではなく、プロレタリアートのために特殊な人間集団によって行使されざるをえない。つまり、国家への全生産手段の集中と一国一工場構想を仮定すれば、プロレタリアートの経済的階級支配は可能である。セルツキーはこう考える¹³⁾。では、プロレタリアートは政治的支配階級になれるか。直接的大衆民主主義と直接的自治がある場合には可能であり、マルクスもプロレタリアートの政治的支配を直接生産者の自治と考えていた。このようにセルツキーは指摘する¹⁴⁾。彼はまた、マルクスが国家死滅後の社会の管理も直接生産者の自治に依ると楽観的に考えていた、と把握している¹⁵⁾。かくしてセルツキーは、マルクスにおける重大な分裂を暴き出す。マルクスは、経済領域では集権的・強制的な一国一工場を構想し、政治領域では分権化され強制のない広範な自治を考えている¹⁶⁾。政治領域では自治的共同体を構想し、経済領域では中央集権システムを考える¹⁷⁾。「マルクス自身の提言によれば、共同体は政治組織ではなく、その組織が本質的に経済的である単なる社会的実体に過ぎない。もしも経済が直接的中央計画に従う一国規模工場として組織されるならば、(社会的) 共同体は、‘本質的に経済的な’組織になりえず、‘本質的に経済的な’労働単位は共同体になることができない。」¹⁸⁾このようにセルツキーは、マルクスの「分裂」を摘出し、「鋭く」その「矛盾」を指摘する。さらにセルツキーは、「土台・上部構造」論をもち出して、マルクスの論理的な不整合を言い立てる。マルクスの唯物史観によれば、経済的土台と政治的上部構造とは、長期的には相互に相反してはならない。だとすれば、垂

直的に組織された経済的土台と水平的に組織された政治的上部構造とは両立しえないことになる¹⁹⁾。一国一工場の経済システムは、自主管理的、参加的、大衆民主主義的政治システムとは両立しないのである²⁰⁾。

このように、マルクスにおいては、経済と政治が衝突しディレンマに直面している。したがって、その経済論が修正されるか、あるいは政治論が修正されるか、どちらかが必要である、とセルツキーは考える²¹⁾。もちろん、民主主義的社会主義を主張するセルツキーは、マルクスの経済論を修正し、市場的社会主义の構想を提起するのである。

三 市場と疎外

さて、セルツキーの市場的社会主义の理論を見る前に、これまでの彼のマルクス批判の若干の問題点に注目しておきたい。既述したとおり、セルツキーは、ソ連・東欧の中央集権的社会主义を批判し、その誤りの理論的原因を、直接マルクスに求めている。マルクスが、市場廃止を主張し、一国一工場型社会主义構想を提起した張本人だという前提に立って、議論が進められてきた。その中には、マルクスを市場廃止論者と規定するために、強引な断定、明白な謬論や重要な論点の無視等が見受けられる。以下にそれらの諸点を検討する。

セルツキーは、マルクスの市場批判には道徳的批判、哲学的批判および経済的批判の三つがあるとし、その中でより重要なものとしてマルクスの哲学的市場批判に焦点を当てて議論を展開している。セルツキーは、市場に対するマルクスの哲学的論難の核心は、彼の「疎外された労働」の概念にある、ととらえている²²⁾。そして、セルツキーは、マルクスは、「疎外された労働」が市場の存在そのものによって生み出されるものとし²³⁾、市場による人間性の否定をなくそうとすれば市場の廃止以外にないと考えたのであろう、と主張する²⁴⁾。ところで、この「疎外された労働」については、マルクスは「一八四四年の経済学・哲学手稿」で述べている。ここで、彼は、第一に、労働者の労働の産物からの疎外について語り²⁵⁾、次いで、労働者の労働からの疎外を取り上げている²⁶⁾。また、これら二つの疎外からの論理的帰結として、第三の、人間の

類の本質からの疎外²⁷⁾、および第四の、人間の他の人間からの疎外²⁸⁾に言及している。そして、マルクスはこのように指摘する、「労働の産物が労働者のものでなく、或るよそのの力が彼に対立しているとすれば、それはただ、その労働の産物が労働者以外の誰か他の人間のものであることによつてのみ可能である。彼の活動が彼にとって責苦であるとすれば、その活動は誰か他の人間にとっては享樂であり、誰か他の人間の生の喜びであるにちがいない。神々でなく、自然でなく、ただ人間自身のみが人間を支配するこのよそのの力でありうる」²⁹⁾。この「他の人間」は、資本と読むことができよう。つまり、マルクスは「疎外された労働」を、生産手段の資本主義的所有に基づく、資本と労働者の支配・従属関係から生ずるものと見ていたのである。市場・流通過程から生ずる疎外ではなく、生産過程の中から生ずる疎外について語っているのである。だが、上述の通り、セルツキーは、マルクスは「疎外された労働」が市場から生ずると看做していた、と断定するのである。これは、マルクスを市場廃止論者と規定せんがための、無理やりな独断ではないであろうか。さらに、セルツキーは次のように述べる。「賃労働の搾取は、商品・市場諸関係が存在しなかったならば、起こりうるはずがないであろう。そのことが、マルクスが次のように提言する理由なのである。すなわち、市場から成長してくる資本関係が廃絶されたときにはじめて、疎外の資本主義的形態は消滅するであろう。市場関係が廃止され、そして商品が再び神秘をともなわないたんなる生産物になったときにはじめて、疎外の市場形態は消失するであろう。そして物が人間を支配しなくなったときにはじめて、人間の外化と対象化の市場形態は消失するであろう、と。」³⁰⁾これは、マルクスからの引用ではないので、セルツキーのマルクス理解を示すものに過ぎないが、マルクスが生産手段の資本主義的所有を批判し、社会的所有を提言したことはその通りであり、そのことによって疎外の資本主義的形態が消滅するであろうと考えていたのは事実である。また、マルクスは、資本主義市場経済を批判していたので、資本主義市場が廃止されれば、疎外の資本主義市場形態が消失すると考えていたことも事実であろう。さらに「市場がなくなれば、疎外の・市場・形態が消失する」というのは、論

理的に真であるから、マルクスであれ誰であれ考えることであり、その通りと言うほかない。しかし、これによって、マルクスが市場の廃止を提言した、ということの証拠とすることはできなからう。

四 一国一工場論

さて、次にマルクスが一国一工場論者であったことを、セルツキーはどのように論証するか。彼は、次のように『資本論』を引用する。「マニュファクチュア的分業、終生にわたる労働者の細部作業への拘束、資本のもとへの部分労働者の無条件従属を、労働の生産性を高くする労働組織として賛美するブルジョアの意識が、同様に声高く、社会的生産過程のいっさいの意識的社会的統御や規制を、個別資本家の不可侵の所有権や自由や自立的独創性の侵害として非難するのである。工場制度の熱狂的な弁護者たちが、社会的労働の一般的組織に対して、それは全社会を一つの巨大工場にしてしまうだろう、という以上にひどい呪いの言葉を知らないということは、まことに特徴的なことである。」³¹⁾そして、セルツキーは、これに対して次のように評価を加える。「こうして、有名な一国一工場の構想は生まれた。マルクスはこの構想の明示的立案者ではなかったけれども、彼は確かにその精神的な生みの親ではあったのである。」³²⁾どうしてこのような評価になるのだろうか。マルクスは、「全社会を一つの巨大工場にしてしまう」という表現を、資本家の呪いの言葉として使ったに過ぎない。これがどうして「一国一工場の構想は生まれた」ことになるのか。これでどうして、マルクスは「確かにその精神的な生みの親であった」ことになるのか。「明示的立案者ではない」のに、どうして「一国一工場構想が生まれた」といえるのか。ところで、資本家の呪いの対象は、『資本論』の原文では、“jede allgemeine Organisation der gesellschaftlichen Arbeit”である³³⁾。つまり、社会的労働の「どんな」一般的組織に対しても、資本家は、それは「一国一工場」だと言って非難する、というのである。ところが、セルツキーの引用では、その部分は、“a general organisation of the labour of society”となっている。³⁴⁾つまり、マルクスの原文にある“jede”がないのである。これでは、上記した「ど

んな」という意味が消えてしまうであろう。すなわち、社会的労働の一般的組織には多様な形態がありうるが、そのすべてに対して資本家は「一国一工場」という非難を投げかける、という意味がなくなってしまうのである。この点は、先の引用中の「社会的生産過程のいっさいの ("jede") 意識的社会的統御や規制」の箇所も同じである。すなわち、マルクスは、資本主義市場の無政府性を批判し、何らかの組織化を考えたことは間違いがないだろうが、その中の一つ「一国一工場」を主張したわけではない。それは「いっさい」の組織化に対する、資本家の呪いの言葉に過ぎない。従って、ここで「一国一工場構想は生まれた」とは言えないのである。セルツキーは、マルクスを引用する際、原文に忠実に訳さず、いろいろと手を加えている。あと一つだけ例を挙げておこう。先の引用の「全社会を一つの工場にしよう」という箇所の「一つの工場」は、マルクスの原文では“eine Fabrik”であるが³⁵⁾。セルツキーの訳では、“one immense factory”となっている³⁶⁾。つまり、“immense”が余分に挿入されているのである。もちろん、これは資本家の呪いの言葉の一部なのであるが、セルツキーは、マルクスが「一国一工場構想の生みの親」であるというニュアンスを強調する為にこれを挿入した、と考えるのは行き過ぎであろうか。

五 市場と自由・平等

以上のように、セルツキーは、マルクスを「市場廃止論者」、「一国一工場主義者」と極めつけ、以下はこれを前提として議論を進めていく。マルクスは資本主義社会を批判する際、その流通過程・資本主義市場だけでなく、その生産過程・資本主義的生産関係に注目することの重要性を強調しているが、この点をセルツキーは完全に無視している。そして、マルクスの資本主義市場批判のみに注目し、これを「資本主義」市場批判と理解するのではなく、資本主義「市場」批判と解し、従ってマルクスが資本主義の廃絶だけでなく、市場の廃止を主張したのだと断定する。このことは、セルツキーが市場と自由・平等との関係について語る際にもみられる。先に概観したように、セルツキーのこの問題に関する見解は、こうである。すなわち、市場は形式的平等、等価性および自

由の水平的関係からなる経済構造を創出する。なるほど、資本主義のもとでは、自由と平等は形式的である。だから市場の廃止を提起することは論理的に見える。しかし、市場の廃止は、自由と平等の経済的基礎の廃止でもある。このように、セルツキーは、マルクスのディレンマを指摘しているのである。しかし、資本主義のもとでの自由と平等の形式性とはなんだろうか。流通過程・市場では、自由な取引が等価交換によって行われているように見える。自由と平等が市場の本質のように見える。しかし、労働者にとっては、「特定の」交換をしない自由はあるが、全く交換をしない自由はなく、その結果として、実際には不等価交換に追い込まれがちとなる。従って、自由と平等は形式的となる。それだけではない。市場における自由と平等の形式性が、形式性のすべてではない。市場における自由と平等の形式性の結果として、労働者が入り込まざるを得ない生産過程、これが支配と従属の世界、つまり不自由と不平等の世界なのである。自由と平等の「形式性」どころのさわざではないのである。自由と平等の否定であり、破壊である。その原因は何か。生産手段の資本主義的所有である。資本主義的生産関係が、その原因である。そうすると、その解決はどこに求められるべきか。自由と平等の形式性および否定の原因の除去に求めるべきである。すなわち、資本主義的所有、資本主義的生産関係の廃止を提起することが論理的であろう。当然マルクスはこのことを提起した。だが、セルツキーは、マルクスは市場の廃止を提起したという前提に立っているため、この論理が分からず、マルクスが、市場の廃止によって、自由と平等の社会的基礎を廃止するというディレンマに陥っている、としか見ない。

このようなセルツキーの謬論は、次のような議論にも現れている。彼は、資本主義と自由の関係についてのフリードマンの意見に与して、こう指摘する。「資本家ですら、どのような交換にも全く参加しなくてよいほど自由ではない……。彼は、それほど自由であつたら、資本家であることをやめただろう。いかなる市場経済においても、自由というものは特定のどのような交換にも参加しないでよい自由としてのみ存在しうるのであり、これで十分な選択の自由である。」³⁷⁾ これも市場しか見ない議論である。労働者は、出来れば、資本とは

どんな雇用契約をもせず、独立した生活を望むかもしれない。しかし、彼は、生産手段を持たないがゆえに、必ずどれかの資本と雇用関係に入らざるを得ない。その中で、彼は自由を否定されるのである。そこに、資本主義と自由という点での問題点があるのである。「特定のどのような交換にも参加しないでよい自由」で「十分な選択の自由である」とは言っていられないのである。セルツキーは、資本家もどんな交換にも参加しなくてもよい自由はない、と語る。確かにそうだろう。しかし、彼は、どれかの交換に参加することによって、支配・従属関係に必ず入る訳ではなく、しかもそこで従属する立場に立つわけではないのである（下請け企業は、親会社との関係においては、従属的であるが、反面労働者との関係では、支配的立場に立つであろう）。つまり自由を否定されるわけではないのである。ところが、セルツキーは、資本家も労働者もどちらも「特定のどの交換にも参加しない自由」があるからとして、両者を同じように自由だと見るのである。労働者はできれば交換したくないと考えることがある。だが、一体、資本とは、全く交換をしないことを少しでも望むものだろうか。資本とは必ず交換するものではないか。交換しなければ、剰余価値が実現できないからである。それなのに「資本家ですら、どのような交換にも全く参加しなくてよいほど自由ではない」とはどういうことであろうか。

六 『経済学批判要綱』

セルツキーは、市場と自由の関係についての同様の論点を、マルクスの『経済学批判要綱』を取り上げて論じている。これを次に検討しておこう。彼は、マルクスのディレンマを指摘して、次のように述べている。「マルクスの論理から出てくるのは、こうである。すなわち、一方では市場（物象的依存性）が人格的依存性を破壊するが、他方では人格的独立性が物象的依存性にもとづいている。マルクスによれば、自由な個性は、物象的依存性（市場）の廃止を前提とする個人の全面的発達だけに、もとづきことができるであろう。マルクスは、人間が、市場の廃止をつうじて人間の物象的依存性を克服することによって、同時に人間の人格的独立性の基礎そのものを破壊してしまうという事実、

関心をもっていない。彼は、希少性という条件のもとで、人間の物象的依存性から生じる人格的独立性を保護しないで、どのようにして自由な個性は創出され維持されるのかという問題に、積極的には答えていない。」³⁸⁾これは、もちろんマルクスの論理ではなく、セルツキーの理解したマルクスの論理である。『要綱』におけるマルクス自身の論理については、筆者は別に論じるつもりなので、ここではごく簡単に、セルツキーの論理を批判しておくにとどめたい。人格的依存性を破壊したのは、身分制度・政治的強制から個人を解放した政治的変革である。これによって、資本主義が成立し発展する条件ができたのである。従って、「市場が人格的依存性を破壊」したのではない。逆である。人格的依存性の破壊が市場の全面的発展を促したのである。ここに成立した人格的独立性とは、政治的・市民的解放を意味する。しかし、この自由は、資本主義社会の上にきづかれたものである。それゆえ、その自由は形式的なものである。物象的依存性とは、この資本主義社会の依存性である。資本主義社会の物質的・経済的依存性は、もちろん流通過程と生産過程の両方に現れる。この両方における依存性の程度が、自由の形式性の程度を決定しているのである。セルツキーは、物象的依存性を市場として理解する。流通過程しか、彼の視野にはない。そして市場から人格的独立性が生じる、と逆に理解する。それゆえ、またしても、物象的依存性の克服は市場の廃止意味するとされ、これは人格的独立性の基礎の破壊だと決めつけられる。そして、これがマルクスの論理から出てくるといふわけなのである。マルクスは、物象的依存性が実は人格的独立性を人格的依存性に転化させると考えているのだが、このことがセルツキーには見えないのである。確かに、『要綱』のこの箇所は、「貨幣に関する章」の「貨幣の成立と本質」に関する記述がなされているところであり、マルクスの交換、交換価値、貨幣に関する分析が集中的に示されている。それゆえ、この部分に関しては、セルツキーのように受け取るのも無理からぬところがあるとも言えよう。しかし、注意深く読めば、マルクスは、物象的依存性から人格的独立性が生ずるなどとは言っていないのである。マルクスは次のように語っている。「個人は独立して見え、互いに自由に出会い、こうした自由の中で交換するよ

うに見える。だがそう見えるのは、個人が接触しあっている諸条件、存在諸条件を捨象している者にとってだけである。前者の場合（人格的依存性の段階…筆者注）、個人の他の個人による人格的制限として現れる規定性は、後者の場合（物象的依存性の上に立つ人格的独立性の段階…筆者注）には完成されて、個人から独立した、それ自身のうちに伏在する関係による個人の物的制限として現れる。」³⁹⁾「この物的依存関係は、外見上独立した個人に自立的に対立する社会的な諸関係にはかならない。つまり個人自体に対して自立化した相互的な生産上の関係にはかならない。」⁴⁰⁾「こうした外部の諸関係は依存関係の除去であることは極めて少ないのであって、依存関係を一般的な形態に解消するだけのことであり、むしろ人格的依存関係の一般的根拠を作り出すものである。」⁴¹⁾この中で指摘されている「存在諸条件」、「個人から独立した、それ自身のうちに伏在する関係」、「社会的な諸関係」、「生産上の諸関係」そして「こうした外部の諸関係」とは、皆同じ事柄をさしており、これによる個人に対する制限や支配が、物的制限であり、物的依存なのである。この物的依存は人格的依存の一般化であって、人格的独立は「外見」だけのことである。つまり、「諸関係の支配」とは、あらゆる幻想をぬぐい去れば「人格的依存に再び変じている物的依存」である⁴²⁾。では、諸個人を支配し、依存せしめ、その人格をも損なう諸関係とは何か。これを、セルツキーのように、市場関係とだけ捉えるのは軽薄であろう。「近代世界においては、人格的諸関係は生産関係、交換関係の純粋な流出として現れ出てくる。」⁴³⁾このように、物象的依存性とは、生産・交換を含む経済的諸関係から、諸個人が解放されていないことを意味しているのである。個人をここから解放し、合わせて「外見的」に過ぎない個人の独立に中身を与えること、これが次の段階の課題であろう。

七 政治と経済の分裂

長々と、セルツキーがどのようにマルクスを批判するかを見てきたのであるが、もう一つだけ、セルツキーが、マルクスにおける政治と経済の「分裂」を暴いているところを検討しておきたい。

セルツキーは、マルクスが『哲学の貧困』で、工場内分業を社会全体に適用すれば、一人の人物が共同体の成員に仕事を配分する社会になるだろう、と語っている箇所を引用し、「マルクスの言うことから察すると、このような編成はひとえに歓迎されるのみであらうということになる。しかし、社会における増大した権威はどうするのか、…マルクスは気にかけていないように見える」と述べている⁴⁴⁾。セルツキーは、ここでのマルクスの言説を、マルクスが一国一工場論者であることの論拠として引用している。しかし、筆者には、セルツキーの断定が先にあって、あれこれの箇所から証拠らしきものを集めていると思われるのではない。例えば、マルクスは、社会内分業と工場内分業に関連して、次のように述べている。「われわれは、一般的に次のように規定することさえできる。すなわち、権威が社会内部の分業を支配することが少なれば少ないほど、分業は、工場内部でますます発達し、そこでますますただ一人の人間の権威の支配下に入っていく、と。このように、工場における権威と社会における権威とは、分業については、相互に反比例しているのである。」⁴⁵⁾この部分をセルツキーの論理で解釈すれば、どうなるであろうか。彼は、マルクスが工場内分業の編成を社会全体に適用することを主張した、と解するのであるから、この部分でマルクスは、社会全体を一人の人間の権威の支配下におくことによって、工場内部の権威を少なくしようとしたということになる。果たしてそうだろうか。この社会と分業の関係についてのマルクスの説明に、ちょうど対応しているのが、社会と交換についての先の『要綱』の記述である。すなわち、人格的依存性を特徴とする社会には、交換が未発達な段階が対応しており、人格的独立を特徴とする社会には、交換の発達した段階が対応する。しかし、この人格的独立の社会では、人間は物象に依存している。こうである。これに対するセルツキーの理解は、物象的依存性を廃止すれば人格的独立性が破壊される。人格的依存性が復活した社会で、どうして自由な個性が生まれるのか、というものであった。一体、マルクスは、物象的依存性の廃止によって人格的依存性を復活させ、社会全体を一人の人間の権威の支配下におこうとしたのであろうか。マルクスはどのように語っているか。「すべての労働生産物、

力能、活動の私的交換は、個人相互間の上位下位の位階的關係の上にうちたてられた配分に対立しているとともに、生産手段の共同的な領有と規制との基礎のうえに協同している諸個人の自由な交換とも対立している（後者の協同生活は、決して恣意的なものではない。即ちそれは、物質的および精神的な諸条件を前提としている）」⁴⁶⁾。「諸個人の普遍的な発展のうえに、また諸個人の社会的力能としての彼らの共同体的・社会的な生産性を従属させることのうえにきずかれた自由な個性は、第三段階である。第二段階は第三段階の諸条件を作り出す。」⁴⁷⁾このようにマルクスは、生産手段の共同体的所有と規制にもとづく、自由な諸個人の協同を、第二段階での諸個人の普遍的発展、すなわち物質的（希少性の克服）・精神的諸条件の発展を前提として考えていたのである。そして、この共同体的所有と個人の自由との関係について「労働者は、その労働手段の所有者となるときのみに、自由となる——これは、個人的形態あるいは集团的形態をとることができる——個人的所有形態は経済的發展によって廃除され、日ごとにますますそうなる——従って共同所有の形態だけが残る」⁴⁸⁾と指摘している。つまり、労働者は、資本主義社会においては、生産手段を所有していないことによって、物象的依存を強いられ、その結果人格的独立も外見だけにとどまっている。従って、共同体的所有によって、物象的依存性を克服し、これによって初めて、人格的にも、物的にも自由となる。このようにマルクスは考えていたのであって、一国一工場によって、一人の人間の權威の支配下に社会をおき、諸個人を上位下位の位階的關係に押し込めて、人格的独立性を破壊しようとしたわけではない。このことは明らかであろう。

ところで、既に見た通り、セルツキーは、マルクスが政治領域では自治的共同体を、経済領域では一国一工場の中央集権システムを構想している、と考えている。マルクスにおいては、共同体は政治組織ではなく、その組織が本質的に経済的な社会的実体に過ぎない。ところが、経済組織は、中央集権的に組織されるから、自治的な共同体は経済組織になりえず、経済組織は共同体たりえない。このように、セルツキーは、鬼の首を取ったように、マルクスの矛盾を指摘しているのである。しかし、上述のとおり、マルクスの経済領域の構想は、

自由な諸個人の共同体である。セルツキーが指摘するとおり、マルクスの政治領域の構想は自治的共同体である。とりわけ、国家死滅後の社会では、その共同体は政治性を失い、単なる経済的組織になってしまうと考えられている。ここには、マルクスの理論における、政治と経済の完全な統一以外のものは見当らない。自由な諸個人の自治的共同体における、政治と経済の合一がマルクスの構想だと言って差し支えないであろう。確かに、マルクスは、私的交換と対立するところの、「生産手段の共同的な領有と規制との基礎のうえに共同している諸個人の自由な交換」の具体的青写真を描いてはいない。だが、セルツキーは、これを一国一工場的中央集権システムと断定し、この前提に立ってマルクスを読んだが為に、経済組織と共同体とがどうしても合致せず、政治と経済とが対立することになってしまったのである。ディレンマに陥っていたのは、マルクスではなく、セルツキーだったのである。

八 民主主義的社会主義の諸原則

さて、セルツキーは、市場的社会主義こそが民主主義的社会主義たりうるのだと考え、その基本的諸原則を次の様に掲げている。

1. 労働が所得のただ一つの源泉である。
2. 生産手段は社会的に所有されており、それを使用するものによって管理される。
3. 生産手段の社会的所有は、国家から分離されている。
4. 固定資産の社会的本質を反映するのは、集団的使用者が社会的ファンドに払い込む租税である。
5. 生産企業と商業企業は、国家から自立的であり、且つ相互に独立している。これらの企業は、中央の指針的計画によって規制される市場の枠組内において活動する。
6. 保健・教育・福祉サービスを提供する諸機関は、完全に市場から分離されている。
7. 公共的サービス・公益事業（芸術・文化・科学が含まれる）を供与する

- 諸機関は、市場から完全に分離されているか、または部分的にそうである。
8. 中央銀行は国家によって直接的にコントロールされる。商業銀行は市場セクターと非市場セクターの両者に対する公共的事業だと考えられる。それゆえ、商業銀行は第10項にあげられている企業や機関として管理される。
 9. 市場において活動する労働単位の直接的管理への参加権は、労働から引き出される。
 10. 市場から完全にあるいは部分的に分離されている労働単位の直接的管理への参加権は、労働と所有と、供与されるサービスやユーティリティーズの消費とから比例的に引き出される。
 11. 社会的な生産手段に対する間接的政治支配への参加権および規制への参加権は、市民としての各人の地位から引き出される。
 12. 所得は、労働の成果に対する各人の貢献に応じて分配される。
 13. 保健・教育サービスや労働不能者に対する社会的便益は、各人の必要に応じて分配される。
 14. 生産手段の社会的所有からの配当は、社会的投資ファンドに蓄積される。
 15. 経済的平等は、生産手段や保健・教育サービスや社会的便益さらに自主管理に対する各個人の平等な接近から成り立っている。経済的平等は所得の平等主義的分配を含まないので、諸個人は、その本質において平等であるとしても、その存在において不平等である。
 16. 自主管理という原則は、ミクロ経済にのみ限定されている。
- 以上である⁴⁹⁾。

セルツキーは、上記の諸項目には、最も重要な社会主義的諸原則が維持されている、とする。すなわち、搾取がなく、土地と資本の私的所有がない。必要に応じた分配の若干の要素（保健と教育）と結合された労働に応じた所得分配。マクロ経済の代議制民主主義支配と結びつけられたミクロ経済における自主管理。市場の社会的規制と社会的コントロールの用具としての中央計画化。社会的福祉の最大化と結び付いた合理的経済計算、等々である⁵⁰⁾。同様にまた、

彼は、ここには自由主義的諸原則も維持されている、と考える。つまり、政治権力と経済力の分離。自立的労働単位への経済力の分散。ミクロ経済的意思決定の分権的システム。消極的自由と積極的自由の最大化。技術革新の手段としての競争。機会均等。職業の自由選択、等である⁵¹⁾。これらはまた、政治的民主主義と自由についての必要条件でもある⁵²⁾。ここでは、社会的利害対立が存在するので、これを調停するために複数政党制が必要だと、彼は指摘する。但し、利害の一致が可能な共同体組織たるミクロ経済単位の中に党派性を持ち込めば、労働者自主管理が破壊されるので、ここには党派的对立が入り込んではならない。逆に、利害対立の全体社会に共同体型編制を持ち込めば、政治的民主主義が破壊されるので、こちらのほうは多党制でなければならぬ⁵³⁾。

次に、セルツキーは、現代の資本主義に労働者自主管理が適用できないかを考察し、これを可能と結論づけている。彼はまず、現代においては、資本の所有と経営とが分離しており、また自由主義はこの分離を既に受け入れているのだから、誰が経営権を行使するかは、便宜的な問題となっている。今日の自由主義の民主主義的性格からして、労働者自主管理が最適だと考える⁵⁴⁾。現代の資本主義は、非民主的な三つの官僚的力、即ち企業、国家、労働の三極構造からなっており、この中で労働は経済的決定権を奪われており、無責任に行動している⁵⁵⁾。この三極システムは、増税、官僚制強化、労使対立激化、インフレーションの悪循環から逃れられない⁵⁶⁾。これを解決するには、国家が私企業を収容するか、伝統的自由主義的資本主義に回帰するか、労働者自主管理の導入か、どれかである。第一のものは自由主義にも、民主主義にも反するし、第二のものは夢想、従って労働者自主管理しかない⁵⁷⁾。もちろん、資本主義への労働者自主管理の導入は、政治の問題であって、これを掲げる政党が、労働組合の支持を得て、立法府を通じて、ということになろう。私有財産の維持を望む自由主義者も、国有化より労働者自主管理を受け入れるほうが得策だと考えるであろう⁵⁸⁾。要するに、自由主義原理と労働者自主管理資本主義とは、理論的にも、政治的にも、実践的にも一致しうる⁵⁹⁾。

九 若干の問題点

さて、以上のセルツキーの議論について、若干の検討を加えておきたい。まず民主主義的社會主義の基本的諸原則であるが、これは、諸個人が經濟活動の主体・生産手段の眞の所有者であるための様々な工夫として、評価してよいと思う。マルクスが語る「労働者は、その労働手段の所有者となるときにのみ自由となる」、そのための「共同所有の形態」が則るべき諸原則と言ってよいのではないかと考える。もちろん、これらは鑄型の如きものではなく、それぞれの社會の特徴に応じて多様であり、いくつかの項目が削られたり、他の項目が付け加わったりするであろうが、いずれにせよ、実践の中で、より良くより詳細に仕上げられるべきものであろう。従ってここでは、一つ一つ取り上げて論ずることはしない。但し、セルツキーは、これらの諸原則を、ソ連等のスターリン型「社會主義」への批判から引き出してくればよかったのである。マルクス批判に多言を費やす必要はなかったのである。しかもセルツキーは、これらの原則を、「マルクスの市場論」批判から引き出しており、マルクスの生産關係論からは引き出さなかった。しかし、社會主義の必要性・必然性は、資本主義的生產關係から導き出されるものである。従って、セルツキーの提起する「市場的社會主義」の中の「市場」の必要性・必然性は理解できるのであるが、「社會主義」の必要性・必然性のほうが今一つ判然としてこないのである。この点が、恐らくは、彼が労働者自主管理資本主義は可能だとしていることの理論的背景をなしているであろう。そしてまた、後に指摘するように、彼の現代資本主義に対する甘い見方とも関連しているであろう。

ところで、労働者自主管理資本主義の方は、いろいろと問題がありそうである。セルツキーが議論の前提としている「資本と經營の分離」が、まず問題となるであろう。巨大銀行資本が中心となった企業グループの存在、その中の各企業の系列下にある多数の下請け企業も含めて、グループ内での株式の相互持ち合いや經營者の相互派遣、という形態をとった資本の存在は、容易に「經營との分離」という特徴づけを許さないほどの実体を伴った権力である。これら

数企業グループによる経済全体の寡頭制的支配。財・政・官三位一体構造による政治支配とイデオロギー支配。これらは、労働組合をも支配構造の中に巻き込む。これが、現代資本主義の社会と政治の実像ではなからうか。しかも、セルツキーは現代自由主義の民主主義的性格をいうが、周知のとおり、現代資本主義は、彼が夢想だとする伝統的自由主義への指向を強めているのである。ソ連崩壊後は、その加速度が強まっているとさえ言えるのである。従って、労働者自主管理資本主義は、仮に可能であるとすれば、社会主義への、国家権力を用いての移行の形態としてのみ存在しうるのである。そうでなければ、それは、労働者の代表による、ないしは労働者の名を騙った、資本のための、労働者に対する支配の形態となるであろう。だが、セルツキーは、現代の悪循環を解決し、民主主義的な方向で資本主義の存続をはかる一形態として、これを考えているのである。彼がこのように考えることの理論的背景として、現代資本主義国家を協同的社会組織だとする、彼の見方を指摘できる。彼は主張する。「ブルジョワ政治家や官僚は、公事の問題に一層公平に接近する。彼等は、短期的経済的利得よりもバランスのとれた権力や政治的安定性のほうをはるかに重んじる。官僚は、ブルジョワジーの利害と短期的にも長期的にも対立する彼らの特殊利害に気がついている。」⁶⁰⁾「支配階級からの国家機構の独立性が増大する過程は、資本の形式的所有者からの企業テクノクラシーの独立性の増大と並行して進行する。こうして、国家は、市民社会から疎外され分離された、相対的に独立した機構に徐々に転化されつつある。換言すれば、国家はそれが常に見せかけてきたものになりつつある。」⁶¹⁾ こうである。だが、これは、先にみた現代資本主義国家の実像に合致しているか。

注

- 1) 小論では、Selucký, R., *Marxism, Socialism, Freedom*. (London, 1979) 宮鍋戦他訳、『社会主義の民主主義的再生』（青木書店、1983年）を取り上げる。以下では、訳書については、著者名と頁数のみを記す。
- 2) Selucký, 3 頁。 3) Selucký, 15 頁。

- 4) Selucký, 17頁。 5) Selucký, 18頁。
- 6) Selucký, 18頁、21頁。
- 7) Selucký, 28-31頁。
- 8) Selucký, 47-51頁。
- 9) Selucký, 52頁、60頁。
- 10) Selucký, 60-64頁。
- 11) Selucký, 70頁。
- 12) Selucký, 85-87頁。
- 13) Selucký, 94-95頁。
- 14) Selucký, 95-97頁。
- 15) Selucký, 99頁。
- 16) Selucký, 100頁。
- 17) Selucký, 117頁。
- 18) Selucký, 118頁。
- 19) Selucký, 103-104頁。
- 20) Selucký, 107頁。
- 21) Selucký, 119頁。
- 22) Selucký, 12頁。
- 23) Selucký, 14頁。
- 24) Selucký, 15頁。
- 25) Marx, K., Engels, F., *Werke*, Ergänzungsband erster Teil (Berlin, 1968). 『マルクス＝エンゲルス全集』、第40巻、431-434頁。以下、M-E, *Werke* と略記し、訳書の巻数及び頁数のみを記す。
- 26) M-E, *Werke*, 第40巻、434-435頁。
- 27) M-E, *Werke*, 第40巻、435-438頁。
- 28) M-E, *Werke*, 第40巻、438頁。
- 29) M-E, *Werke*, 第40巻、439頁。
- 30) Selucký, 14頁。
- 31), 32) Selucký, 21頁。
- 33) Marx, K./ Engels, F., *Gesamtausgabe*, II-5 (Berlin, 1983), S. 290. 以下、MEGA と略記す。
- 34) Selucký, *op. cit.*, p. 14.
- 35) MEGA, a. a. O.
- 36) Selucký, *loc. cit.*
- 37) Selucký, 196頁。但し、この訳文は、*Ibid.*, p. 144 に基づいて、訳書のものとは少し変えた。
- 38) Selucký, 34頁。
- 39) Marx, K., *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie, (Rohentwurf) 1857-1858*, (Berlin, 1953). 高木幸二郎監訳、『経済学批判要綱（草案）1857-1858年』（大月書店、1958年）、

84頁。以下、*Grundrisse* と略記。

40), 4. \ `), 43) *Grundrisse*, 85頁。

44) Selucký, 20頁。

45) M-E, *Werke*, 第4巻、156頁。

46) *Grundrisse*, 80頁。

47) *Grundrisse*, 79頁。

48) M-E, *Werke*, 第35巻、194頁。

49) Selucký, 244-245頁。但し、訳文は、原文によって、少し変えてある。

50), 51), 52) Selucký, 249-250頁。訳文は少し変えた。

53) Selucký, 250-251頁。

54) Selucký, 263頁、266頁。

55) Selucký, 264-265頁。

56) Selucký, 267-268頁。

57) Selucký, 269-273頁。

58) Selucký, 277-279頁。

59) Selucký, 280頁。

60) Selucký, 84頁。

61) Selucký, 85頁。